長江は第一線にして，満蒙は最後の塹壕なり
――宮地貫道の事跡について（その 1）――

村　上　勝　彦

1．忘れられた人物

これまで研究史上でまったく取り上げられてこられなかったが，日本近現代史において考察されるべき興味ある一人の人物について，その事跡を追ってみたい。その人物の名は宮地貫道である[1)]。故今村仁司氏と何度か彼について話題にしたことがあるので，この小論をもって故今村氏追悼の意を表したい。貫道の活動は以下の３つにおいて，日本近現代史上の意義が認められる。第１は，第２次大戦前の上海における邦字紙『上海日日新聞』の創立者・経営者として，つまり海外マスコミ事業の担い手としての活動，また長らく同紙主筆として同時代の中国政治及び日中関係に関する言論人としての活動，第２は，満州事変後の彼の言説が「一笑に付され」，孤立し，同紙から離れた後，札幌農学校出身の経歴を生かし，当時最大の輸入物資であった綿花（大陸綿花）の栽培をセレベス島で成功させ，日本勢力圏内で普及させようとした綿花栽培事業者としての活動，第３は，その綿花（宮地綿）栽培を基盤に，第２次大戦直後に「日本農民同盟」を結成し，生産力主義的な農民運動を展開した活動，である。第１から第２の活動への転換について，貫道自身は，「少壮にして支那に志し，居を上海に定めて以来，三十余年間の支那研究は，不幸にして筆者を支那問題の預言者たらしめたのである。昭和七年上海事変が起るや，時局委員の一人たりし筆者は，支那の前途を見透し，徹底解決を主張した所，支那及支那人を知らぬ人たちから一笑に付されてしまった。斯くて支那に見切りをつけた筆者は，二十数年間の経営に係る上海日日新聞紙上に，『惨憺たる民族戦来らん』との一文を掲げ，在支事業一切を門下に托し，久恋の地支那を去り，余生を棉花研究に捧げる決心をしたのであった。早晩永久戦となるべき日支の争ひは，遂に英米と利害の衝突を来し，綿業立国の我経済が，根本より破壊されるを予知したからである。」[2)] と述べている。この小論の表題，「長江は第一線にして，満蒙は最後の塹壕なり」というスローガン，貫道自身はモットーと称しているが，それは国民革命軍の北伐以来の貫道の基本的考えであり，そのために，日本及び日本人社会において「一笑に付され」，孤立し，第１の活動を放棄した。彼が予想したごとく，その後満州事変は日中戦争の前奏となり，今次敗戦まで「永久戦」のごとき「惨憺たる民族戦」へと発展していった。

貫道の活動はこのようにかなり広範囲にわたっているため，また関係資料が少ないため[3)]，

現時点では，まずは断片的な事跡紹介に止まらざるをえない。現在筆者が抱いている問題意識は，30年余の中国滞在を通じて培った独自の中国観・中国人観をもつ貫道の中国政治，日中関係に関する言説の特徴は何か，宮地綿の栽培・普及の意義は何か，第2次大戦後における生産力主義的な農民運動の可能性はあったのか，などを究明することである。

ところでこの小論では，紙幅の関係もあり，貫道の事跡の第1回目として，第Ⅰ期にあたる中国活動期に対象時期を限定する。

注――――――――

1）宮地貫道にふれている数少ない書の1つが宮崎滔天全集である。そこでは，「宮地貫道なる人物について，本文や『出鱈目日記』等々，滔天によって記述されている以外，それほど詳らかではない。」とされている（宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』第3巻，平凡社，1972年，611頁）。以下，『滔天全集』と略す。刊年は，第1，2巻（1971年），第4巻（1973年），第5巻（1976年）。宮地貫道は歴史上の人物と考え，以下，敬称を略し，貫道と略称する。

2）宮地貫道著『棉花国策―棉作問題の根本的解決―』（宮地貫道，私家版，1943年）〔Ⅴ-1〕自序2～3頁。この書の題名「棉花国策」は，畏友安岡正篤の忠言によって付けられた，とある（同書，はしがき2頁）。書名の後ろの〔　〕は，次の注3で述べる貫道関係資料の整理番号であり，以下，同様である。貫道は，当時の慣用どおり「支那」という語を使っているが，本稿では，引用文中などを別にすれば，「支那」，「清国」と使っているところを基本的には「中国」とする。

3）貫道のご遺族である宮地幸子氏から関係資料の寄託を受けたことに謝意を表す。資料は以下，「貫道資料」と称する。ダンボール箱でほぼ2箱分があり，貫道死後，膨大な日記類などはかなり廃棄処分されたとのことである。残された日記類はほぼ第2次大戦後のみ（1945年8月5日～1953年11月14日）〔Ⅵ-1〕である。宮地幸子氏は，貫道の長男，故宮地杭一氏の未亡人である。

2．中国への関心

貫道の中国への関りの初期において，運営する学校に初めて中国人女子留学生を受け入れた下田歌子，中国人留学生であり後に中国国民党幹部となる張継などとの関わりが重要である。貫道は1872（明治5）年6月28日，土佐に生まれ，1953（昭和28）年11月16日に東京で亡くなった。享年81歳である。土佐生まれに関わって，同じく土佐出身の総理大臣浜口雄幸との縁があり，そのことが後に面識を得，浜口総理に対し対中国政策是正について説得を試みる契機となった[1]。貫道のそもそもの名は利雄で，1903～04年頃に貫道に改名したが[2]，これは後述のように，1902年後半～03年頃と推定される中国行きに関係していると思われる。後に創立・経営・運営する『上海日日新聞』紙上では成民という筆名を使っている。札幌農学校農学科の第15期生であり，1897年7月7日，満25歳で農学士13名の1人として卒業した。同校では，新渡戸稲造の講義を受けており，貫道は著書の中で，「筆者は青年時代に学校で，新渡戸博士より，日本農業と西洋農業との比較を聞いて，非常に興味を感じた」[3]と述べている。ちなみに新渡戸は，貫道の全在学期間を含む1891年2月から1897年10月ま

で同校教授であった[4]。土佐出身の貫道がなぜ札幌農学校に入学したのか。その理由の一端は家庭事情にあったようである。土佐の人である生母は，札幌の医師・馬島家に嫁ぎ，長男を生んだが離縁させられて土佐に戻り，宮地と再婚して貫道 1 人を生んだ。しかし生母は，札幌に残された長男が病弱のこともあって再び馬島家に戻されて復縁し，その後 8 人の子供を生んだとのことである。貫道は後に，土佐から生母のいる札幌に移転し，義父にあたる馬島家の許に書生待遇で身を寄せていた[5]。この辺のことを，貫道は著書の中で，「筆者の家は代々武人…，青年時代より軍事に興味を感じ，一時は軍人たらんと志した位ひであったが，一家の都合より農学を専修した」[6] と述べている。後の中国行きの選択には，このような家庭事情も与ったかもしれない。

貫道の中国関心はいつごろから，どのような契機で生じたのか，その結果としての中国行きはいつなのかははっきりしない。この場合の中国行きとは一時的な旅行ではなく，長期生活を予期しての渡航である。まず邊見勇彦（へんみゆうひこ）なる人物の自伝からその辺の一端が知れる。邊見は鹿児島出身だが，札幌にある実姉の嫁ぎ先のもとになかば食客的に寄寓し，札幌農学校付属土木工科学生として籍を置いていた時，「義兄と同期生で，土佐の産，宮地利雄と云う新学士が，一夕我輩を招待して大いにお互いの胸中を吐露し合った事があった。眉目秀麗，覇気満々，一見凡人ではない。只お国独特の能弁家で，多少策士的小才子風が玉に疵だが，由来，札幌農学校は，新渡戸先生や内村先生の如き，畑違ひの傑物が輩出して居る処だ。ひょつとすると，この宮地氏なども，大脱線をする人物かも知れないと，見当をつけたのが抑々奇縁のはじまり，大いに意気投合して，此に同氏の支援を受る事になったのだ。札幌の辺鄙で，宮地氏と架空的誇大な妄想を策し，大陸進出を夢見て居た我輩に…」[7] と伝記にはある。実姉の夫である義兄とは，札幌農学校の新学士として最下級の助教授だった時任一彦（ときむねかずひこ）を指す。伝記には貫道は新学士と記されているので，貫道が卒業した 1897 年 7 月以降のことと考えられ，記述内容から貫道はすでに大陸進出を期していたと推測できる。しかしいつごろから中国行きを考えたのかはなお不明であるが，彼の卒業後の消息の一端は一連の「札幌農学校同窓会報告」から判明する。卒業の年の 12 月末現在では，住所が札幌ではなく東京，職業は不詳とある。しかし東京との住所記載はこの 1 回のみで，報告のある 1899 年 2 月末現在～1901 年 8 月末現在は札幌に変わっており，職業は実業とある。1902 年初及び翌年春の住所記載では再び東京に変わり，その翌 04 年春には上海となる。以上の住所記載から，札幌から東京への長期滞在のための移転が 1901 年 9 月～翌年初めの間，中国渡航が 1903 年春～翌年春の間と推測できるが，同窓会報告書という性格を考えれば，これら移転の時期はもう少し早いかもしれない[8]。実際，中国渡航については，下田歌子伝記及び邊見自伝から 1902 年後半とも考えられ，また『滔天全集』には 1902，03 年頃と記されているので，現時点では 1902 年後半～ 03 年としておく[9]。興味深いのは，住所表記は 1903 年春が東京麹町区隼町上海訳書局，翌年春が上海英租界四馬路五十五号作新社となっており，共に上海，出版関係に関わ

長江は第一線にして，満蒙は最後の塹壕なり

っていることである。職業は東京では実業，上海では著述業となっている。

もう1つの情報がある。貫道は著書の中で，「明治三十四年筆者が東京四谷左門町に於て，日支人混交の私塾を開き，張継，蔡鍔，及び未だ少年であった馬君武君等と，眠食を共にした間柄であった。」[10] と述べている。これによれば1901（明治34）年にすでに東京に移転しており，同窓会報告では1902年初めの住所表記がただ東京のみであったのだが，実は四谷左門町であったことになる。翌年春にはそこからさほど離れていない麹町区隼町に再移転したのか，あるいは住所記載を仕事場に変えたのか，そのどちらかと思われる。張継などについては後述する。

注

1）浜口雄幸（1870～1931）の叔父が土佐勤王党の首領清岡成章であり，貫道の伯父がこの清岡の腹心という関係であった（成民「（東京土産）内閣物語（4）」，「成民集」1頁，月日は不明だが，浜口内閣が1929年7月2日に成立した直後の『上海日日新聞』掲載記事と推定される）。「貫道資料」中の『上海日日新聞』は貫道執筆部分のみが残されており，「成民集」〔Ⅲ-8-①〕と名づけられたスクラップ帳1冊（1929年7月～1934年1月頃，1～149頁）と，バラの切抜き記事〔Ⅲ-8-②〕のみである。記事掲載の月日は不明だが，内容からほぼ判明できる。以下は，「成民集」の頁数を記しておく。貫道は，江口定條の仲介により，1930年4月14日午後4時から1時間ばかり，十数年ぶりに浜口首相と会見している。その時，「声が以前よりは一層圓味を帯びて，朗らかな土佐音を聞いた時は，懐かしき感し（ママ）が起こった。」としており，貫道は，浜口に対し，対中国外交の根本方針が誤っていること，このままでは対中国政策の破綻，さらに内閣瓦解に至るであろうと説いた（「東京みやげ話（11）濱口首相と十数年振で会見」，「同（12）濱口首相へ進言　傾聴はしたが実行は疑問」，「成民集」43頁）。貫道は1930年春の東京滞在中の4月8～22日，精力的に活動しており，例えば，4月10日は午後4時から1時間半，幣原外相と，4月14日は2時間，前台湾総督伊澤多喜男（1869～1949）とそれぞれ会見している。仲介者の江口定條（1865～1946）は三菱系統から満鉄副総裁になった人物，伊澤は大学同期生として浜口総理と親しく，民政党系の内務官僚の総帥で政界の黒幕的人物。

2）『札幌農学校同窓会』第15回報告（明治37年4月）で「利雄名改」（同，30頁）と記載されている。これは田中愼一北海道大学教授のご教示による。

3）前掲『棉花国策』160頁。「貫道資料」の中に，新渡戸稲造（1862～1933）らしき人物と貫道など計3人を船上で撮った写真が残されている〔Ⅲ-⑥-24〕。

4）同編集委員会編『新渡戸稲造全集』第1巻（教文館，1969年）449頁。

5）2001年4月6日及び2008年1月13日，宮地幸子氏からの聞き取りによる。

6）宮地貫道著『対支国策論―満洲上海両事変解説―』（上海乍浦路121号，宮地貫道，私家版，1932年）［Ⅲ-1］112頁。

7）邊見勇彦著『満洲義軍奮闘記：自伝』（先進社，1931年）27頁。

8）『札幌農学校同窓会』報告の第6回（1898年2月，1897年12月末現在），第7回（1899年2月末現在），第8回（1899年上旬調査），第9回（1900年1月末現在），第10回（1900年7月末現在），第11回（1901年1月末現在），第12回（1901年9月，同年8月末現在），第13回（1902年2月），第14回（1903年5月），第15回（1904年4月）による。第16回（1906年9月）～

第 29 回（1913 年 12 月）は第 15 回と同じ住所・職業記載である。このように，報告の刊年月と，記載内容の現時点とは不一致であることに留意が必要だが，ほぼ 1 ～ 2 ヵ月のズレと思われる。第 6 回は住所が東京牛込区袋町 12 番地石坂方，職業が不詳，第 7 ～ 10，12 回は住所が札幌区南 1 条 4 丁目馬島（嶋）方，職業が実業，第 11 回は住所が札幌区北 6 条西 6 丁目であり，第 13 回は住所が東京とのみあり，職業が実業，第 14 回は本文のごとくである。同報告内容は上記の田中愼一教授のご教示による。記して謝意を表す。

9）後述の河原操子が上海に着任したのが 1902 年 9 月で，それとほぼ同じ「時代」に邊見が上海で作新社を興したとされており，また貫道は邊見に先立って上海に行ったと邊見自伝で述べられている（河原操子著『カラチン王妃と私－モンゴル民族の心に生きた女性教師－』芙蓉書房，1969 年，304 ～ 305 頁，故下田校長先生伝記編纂所編『下田歌子先生伝』大空社，1989 年，438 頁，前掲『満洲義軍奮闘記：自伝』34 頁，前掲『滔天全集』第 4 巻，485 頁）。

10）前掲『対支国策論』25 頁。

3．下田歌子との出会い

では貫道は東京においていかなる活動をしていたのか。東京に移転後の 1902 年頃，下田歌子主宰の中国語学習会に参加していることが判明する。下田歌子は当代きっての名士であり，この頃，華族女学校学監兼教授，常宮・周宮両内親王の教育係，帝国婦人協会会長，同会付属の実践女学校（現在の実践女子大学）及び女子工芸学校校長の任にあり，中国関係では，1900 年 8 月に別離の面会にきた恵州蜂起直前の孫文に会っており，翌年からは実践女学校に中国人女子留学生を日本で初めて受け入れている。中国関心を強めている下田は，自分が住む永田町の官舎を会場に，元中国人留学生を教師とするささやかな中国語学習会を主宰した。下田自らも加わる参加者 7 名は皆初学者であり，他に時任たけ子，内田薫，木村芳子，宮地利雄，有坂致太郎，邊見勇彦がいた。時任たけ子は下田が校長をしている実践女学校の舎監であるが，先にふれた邊見の実姉で時任一彦札幌農学校助教授の妻であり，時任助教授がドイツ留学を命じられた 1900 年に東京に出て家族で下田邸に寄寓していた関係である。木村芳子は下田から最も信頼されていた同校教員で，後の 1904 年には粛親王家の特設女学堂教師として北京に派遣されている。宮地利雄は貫道のことである。暴れん坊といわれていた邊見は時任たけ子の実弟という関係で下田から訓育を受けることとなり，後に下田から援助を得ることになるが，日露戦争時には馬賊の頭目となって満州義軍に投じている。内田，有坂については不明である。時任・木村・邊見はいわば下田歌子関係者といえよう。貫道がいつ，どのような契機で下田との面識を得たのかは不明だが，貫道がまだ札幌在住と思われる 1900 年 8 月に下田は札幌で講演を行なっていること，また，時任助教授は貫道の同期生であり，邊見はその義弟であることから，東京移転前に面識を得る機会があったかも知れないし，東京に来てから邊見，時任助教授あるいは中国人留学生を通じて知り合ったのかもしれない[1)]。

もう 1 人の重要な人物がいる。この中国語学習会の教師，戢翼翬（しゅうよくき）である。彼は中国人留学

生中の逸材，傑物といわれた人物で，1896 年 3 月，清国総理衙門（外務省にあたる）から選抜されて日本に送られた最初の中国人留学生 13 名のうちの 1 人である。高等師範学校長加納治五郎のもと（亦楽書院）に 3 ヵ年おり，卒業後すぐに東京専門学校（現在の早稲田大学）に入学し，3 ヵ年学んだ。在学中に中国人のための日本語教本として名著の誉れ高い『東語正規』（1900 年）の共著者となり，仲間と日本書籍の翻訳出版社である訳書彙編社を作ったりするなど文化活動に従事した。その延長線上で，後に貫道との共同事業が展開される。彼は他方で，「猛烈な革命思想を抱いてゐる才気煥発な青年志士」[2] であり，在学中の 1900 年には，中国に戻って漢口で唐才常らとの武装蜂起の準備に加わり，失敗して仲間 20 名が処刑されるなか，かろうじて日本に逃げ戻っていた。学校卒業後，清国公使館に勤務して参差官となっていた時に，下田から頼まれたのであろうか，中国語学習会の教師になった。同公使館は麹町区永田町にあった下田の官舎のちょうど向かい側に位置していたという地理的便宜があった[3]。先に述べた貫道の東京での住所が上海訳書局であることから，貫道が上海と関係ある翻訳・出版事業に従事していたことが推測できるが，戢翼翬もそうした方面と関わりが多く，後述のように上海の作新社とも密接に関わっている。中国人留学生たちは，日本語に通じるようになると，母国への啓蒙活動のため，政治・法律・経済・教育などの日本書籍を翻訳し，それらを集めて雑誌を作っており，そのため各省単位の雑誌は当時たくさん出されていた[4]。貫道の出版活動の一端は，1902 年頃刊行と思われる『政法類典』の共訳者としてその名が見られる。ちなみにその共訳者，中国人留学生の章宗祥は後に司法総長・農商総長・駐日公使となった大物であり，1919 年の五・四運動時に 3 人の「売国賊」のうちの 1 人と糾弾された人物である[5]。

この中国語学習会参加の頃，前述のように貫道は日中人混交の私塾を開き，張継，蔡鍔，馬君武などの留学生と共同生活をしていたが，邊見自伝によると，「下田先生を中心に，支那語学習に専念する頃，四谷愛住町に一家を卜し，梁山泊的根拠を構えたのである。張継君を始め青年志士の一団と，日支共同の自炊生活を経営して，熾に共存共栄を発揮して居った。」[6] とあり，ここには貫道の名はないが，張継，蔡鍔，馬君武の名があるので，貫道は邊見を含む彼らと一緒に共同生活をしていたと思われる。邊見自伝には後述の秦力山の名もあがっている。貫道が著書の中で，「渡支の際は同行して，筆者の事業を助けて呉れたのは張継君であった。爾来間断はあったけれど，親交を続けること二十五年間，尋常の交誼を以って認むべき間柄ではなかった。」[7] と述べているように，これら留学生の中で張継との関係がとくに重要である。張継は戢翼翬より遅れること 3 年，1899 年来日の留学生であり，貫道らと共同生活をしていた 1902 年には東京留学生青年会に参加し，横浜在住の孫文とも面識を得ており，翌年は日本追放となって帰国している[8]。この張継の中国帰国の際に，貫道が伴われて中国に渡ったとすれば，貫道の中国渡航は 1903 年のことになるが，この点はやや曖昧なので，やはり中国渡航を 1902 年後半～ 03 年としておく。その後張継は中国国民党の古参幹部となり，

後述のように，貫道の中国における活動と密接な関わりをもつ。『滔天全集』で引用されている「張継事略」によると，「貫道は，…明治 35 年，張継，秦力山，戢翼翬，そして下田歌子らとともに日中両国の同時革命を主張する興亜会を組織したりしたが，つねに大言を好むばかりで，真剣に革命のことを図ることなく，無定見の人物であった」[9] とされている。しかしこの叙述には疑問がある。とくに前段の興亜会云々については誤りと思われる。同会は明治 35 年ではなく，1880（明治 13）年という早期に，渡辺洪基・宮島誠一郎らの発起によって設立された幅広い会員からなるアジア主義的な団体である [10]。また，似た名称の組織に 1898（明治 31）年に結成された東亜会があるが，これは犬養毅・平岡浩太郎・宮崎滔天らが参加したもので [11]，これも該当しないと思われる。後段の人物評価については，前述のように邊見自伝の人物評価，「能弁家で，多少策士的小才子風が玉に疵…大脱線をする人物かも知れない」という人物評とやや共通する面がある一方，貫道がどこまで中国革命に関わっていたのかは不明なので，「真剣に革命のことを図る」という叙述が当たっているのか否かはわからない。しかし，貫道と中国語学習会で一緒だった下田，戢翼翬が共に列挙されている点は興味深い。先にふれた秦力山は鞏黄とも名乗り，宮崎滔天著『三十三年之夢』（1902 年）の最初の漢訳本『孫逸仙』（1903 年）に序文を寄せている人物である [12]。貫道の著書で挙げられている共同生活仲間の蔡鍔は，張継と同年に来日し，戢翼翬と同様に翌年帰国して唐才常らと共に漢口で武装蜂起の準備をしたが失敗して再来日した留学生であり，1904 年には帰国し，後に辛亥革命に参加し，孫文などよりも右に位置する梁啓超の弟子にあたるが，反袁世凱帝政の護国軍を指導した人物で，早期に死去している [13]。もう一人の馬君武は，貫道が中国に渡った後，中国革命同盟会が東京で結成され，機関紙『民報』の発行所である民報社が宮崎滔天の自宅におかれていたが，そこに張継などとともに出入りしていた人物である [14]。

以上のように，貫道は東京において，一方では中国への関心を深める下田，邊見らの日本人と，他方では日本で母国への啓蒙活動を活発に展開する中国人留学生と密接に関係していた。中国人留学生の政治的性向は，貫道が日本にいた頃は梁啓超らの改革派と孫文・黄興らの革命派とが混交している状態であったといえる。貫道が中国に渡った後は分岐が決定的となり，後者の革命派が圧倒的になっていった。また後述のように，この頃の貫道は宮崎滔天との面識をまだ得ていないようである。以上，貫道の札幌農学校在学，札幌から東京への一時及び長期移転，日中人混交の私塾への参加，中国人留学生との共同生活，中国語学習会への参加，上海訳書局での活動は，1894 年頃～ 1903 年頃にかけてのことであり，ちょうど日清戦争から日露戦争前の時期にあたる。この時期は，一定数の日本人青年が中国への関心を高め，中国の変革に関わろうと思い，中国に渡っていった時期にあたる。貫道もそのうちの 1 人であったと思われる。

長江は第一線にして，満蒙は最後の塹壕なり

注 ――――――――――

1）下田歌子（1854 ～ 1936）については，前掲『下田歌子先生伝』390 ～ 392，417 ～ 425，427，753 ～ 757 頁。黒龍会編『東亜先覚志士記伝』の満州義軍関係の部分には邊見の名は見られない（原書房復刻書，1966 年，上巻，815 ～ 836 頁）。

2）前掲『満洲義軍奮闘記：自伝』31 頁。

3）前掲『下田歌子先生伝』424，427 頁，さねとうけいしゅう著『中国留学生史談』（第一書房，1981 年）2 ～ 3，10 ～ 12，16 ～ 19，42 頁。彼ら 13 名は駐日清国公使が西園寺公望外務大臣兼文部大臣を通じて依頼した加納治五郎のもとで学んだが，7 名のみが卒業した。下田の官舎は三年町にあったともされている（前掲『満洲義軍奮闘記：自伝』30 頁）。

4）前掲『中国留学生史談』154 頁。

5）同上，40 ～ 45 頁，臼井勝美著『日本と中国－大正時代－』（原書房，1972 年）154 頁，小島晋治・丸山松幸著『中国現代史』（岩波書店，1986 年）88 頁。章宗祥（1879 ～ 1962）は，浙江出身で，1899 年に来日して日華学堂に入り，第一高等学校から東京帝国大学法科に進み，1903 年に卒業して帰国した（中国社会科学院近代史研究所，宋志文・朱信泉主編『民国人物伝』第 3 巻，中華書局，1981 年，174，177 頁。同書は巻数によって主編者，刊年が異なる）。

6）前掲『満洲義軍奮闘記：自伝』35 ～ 36 頁。共同生活場所は，貫道の著書では四谷左門町，邊見自伝では四谷愛住町とやや異なっている。邊見自伝では同居者中の一人として奏力山とあるが，後述のように秦力山の誤りと思われる。

7）前掲『対支国策論』25 ～ 26 頁。

8）張継（1882 ～ 1947）は，前掲『民国人物伝』第 2 巻，114 頁。張継については後述する。

9）前掲『滔天全集』第 5 巻，549 頁。

10）前掲『東亜先覚志士記伝』上巻，414 ～ 416 頁。ここには下田歌子の名はない。

11）前掲『滔天全集』第 5 巻，666 頁。

12）同上第 1 巻，615 頁。

13）蔡鍔（1882 ～ 1916）については，前掲『民国人物伝』第 1 巻，93 ～ 100 頁。

14）前掲『滔天全集』第 1 巻，575 頁，第 5 巻，682 頁。

4．上海作新社にて

貫道は中国ではいかなる生活，活動をしていたのか。まず中国活動期という第 I 期についてである。彼自身，最初の著書（1932 年 7 月刊）の中で，中国滞在の 30 ～ 31 年間を振り返って，以下のように述べている。大部分を上海のような土地で過ごし，初めの 12 年間は商売人時代で，中国人相手の商工業に従事し，そのかたわら出版及び印刷業を経営した。中国に行った初め頃，商用のため中国内地を旅行したが，今日のような外国風旅館設備がないので，中国人手代と共に中国宿で一夜を過ごすことが多かった。中国滞在の 30 年間，あらゆる種類の中国人と接触し，とくに商人及び労働階級とは 30 年間，引き続き寝食を共にしてきた。それは自分の生活及び生存の必要に迫られたもので，ずいぶん真剣になって彼らと対応してきた。このように 30 年間中国人と利害を共にしてきた。商売人時代に小規模ながら成功し，

1914 年に邦字新聞を創設し，以後 19 年間は経営者兼記者として，今なおそれを継続している，と[1]。また，その 11 年後に刊行した 2 番目の著書（1943 年 7 月刊）では，この小論の「1. 忘れられた人物」で述べたように，「少壮にして支那を志し，居を上海の地に定めて以来，三十余年間の支那研究」[2] を行なったとしている。また後述のように，1926 年頃から貫道は「始めて社会の表面に現われ」，激しい論陣を張るようになった。以上の経歴から，貫道の中国活動期を，1902 後半・ 03 年～ 14 年秋の第 1 期（ほぼ 12 年間），1914 年 10 月の『上海日日新聞』創刊～ 26 年秋の第 2 期（ほぼ 12 年間），1926 年秋～ 34 年初の第 3 期（ほぼ 7 年間）の 3 つに区分できる。第 3 期の終わりを確定するのは困難だが，1931 年 9 月～ 32 年 1 月の満州事変・上海事変時における貫道の「孤立化」，同年 4 月頃からの長期間に及ぶ同紙への執筆中止，同年 11 月の東京における拠点施設（成民廬）の完成，33 年 7 月からのセレベス綿作問題への没頭，34 年 1 月の同紙への絶筆を期した寄稿，同年 2 月の初のセレベス島行きなどが，順次転換への契機をなしている。したがってとりあえず第 3 期の終わりを 1934 年初めとしておく。それ以後，第Ⅰ期の中国での出版・新聞活動から，第Ⅱ期の綿花栽培活動に移った。

中国活動期の第 1 期は，上海の作新社で主に活動していたと思われる。その理由は，「札幌農学校同窓会報告」での住所・職業記載は 1904 ～ 13 年の間変わらず，上海英租界四馬路 55 号作新社，著述業となっているからである。また貫道が後述の河原操子から受け取った 1904 年 1 月の封書の宛先は作新社とあり，貫道が婚約者，鈴木珪宛に出した 1913 年 6 月の手紙では作新社用箋を使用し，差出住所が同じ作新社であることも傍証となる[3]。では作新社とはいかなるところか。幸いなことに「貫道資料」中に作新社を撮った写真が残っている。棟続きの家屋である同社の正面入口に貫道を含む 6 人（背広姿 3 人，中国服姿 3 人）が立ち，「作新社」という横文字の大看板が 2 階ベランダに掛かり，「作新社図書局」という縦文字の小看板が左脇の 2 階から吊り下げられ，入り口の左右には「批発東西編訳新書精印中外図書報章」，「専售印刷機械鉛字花辺鉛條鉛板銅模」という 2 枚の双聯状の縦文字看板が掛かっており，その文字から，編訳新書の販売や図書・新聞の出版，印刷機械・活字などの販売という図書販売・出版・印刷機具販売業を営んでいたことが確認できる[4]。家屋は，「世界的に繁華な四馬路の中心，一品香の向ひ合はせにある，堂々たる三層楼の西洋家屋を撰定し」[5] たものである。

作新社の創設者・経営者について，はっきりとはわからないが，邊見自伝では，「元代議士の肩書ある越後の素封家山田氏が，下田先生の熱情と，人格に感動して，対支事業の一助にもと，四万金を提供された。…機敏な宮地氏と， 戢先生が準備の為先発となって上海に乗り込」[6] んで創設されたとなっている。先にふれた 戢翼翬 について，別の本では，日本滞在時に，後から来日した優秀な留学生たちと共に訳書彙編社を作り，この団体がその後，『世界大事表』などの編訳書を出版した出洋学生編集所を上海に設け，それが下田歌子との共同事業

である作新社になったとされている[7]。また『滔天全集』では，作新社は貫道が1902，03年頃，張継などの援助のもとで，上海で経営した図書出版と印刷を兼ねたものであるとしている[8]。資金提供者は別として，下田，貫道，戢翼翬，邊見らが創設に関わっていたことになる。ここでは貫道の中国渡航に同行したのは戢翼翬とされ，貫道の自著では張継となっているのでどちらだったのか，あるいは両人だったのかはわからない。作新社は日本の政治，法律，経済，教育書などを漢訳し，他方で中国青年層への新知識普及を目的に月刊雑誌『大陸』を出版し，それらを中国各地に売り広める一種の書籍店，書籍商社であった。とくに下田の著書については考慮して漢訳出版し，「実践女学校附属清国女子師範工芸速成科縁起」という一文を『大陸』1905年3月号には掲載しており，貫道自身も中国人の国民性を論じた「有民無士之国」「有衆生無菩薩之国」と題する論考を寄稿している。邊見は自己の販売活動について，遠くは四川省の奥地から湖北，湖南はもとより，南は広東，福建省方面まで売り歩き，例えば南昌では1週間滞在して約700弗回収したりしたと述べており，貫道も同様の活動をしていたことが自著から想像できる。そうした活動の結果，作新社は開業半年足らずで目に見える業績をあげ，新刊書も10種以上に及び，日露開戦時の1904年春頃には北京支店開設を計画するまでになった。その頃邊見は貫道のことを宮地社長と呼んでいるので，最初からかあるいはある時期からなのか，貫道が経営責任者の地位に就いていたことになる[9]。

作新社はこうした図書販売・出版・印刷機具販売業のかわたら，「我日本に傾倒して居た支那青年革命児に，普遍的な知識を扶植して，以って隣邦志士との連絡を密にし，我党活躍の基礎階梯となすべく目論だのであった。…主義目的を同一にする両国の青年志士は，真に兄弟となって社業に精励したものだ。」[10]という政治的性格ももっていたようである。例えば，邊見の四川方面へのほぼ1年にも及ぶ営業活動には，秘密結社哥老会の内情を探り，青年志士との連絡を図り，専ら地理人情の視察を兼ねるという裏面の目的もあり，東京四谷の共同生活で一緒だった留学生張培村も同行していた。張は哥老会の首領格で重慶方面の隠れた勢力家であったという[11]。しかし作新社の具体的な政治的活動の内容，貫道のそれへの具体的関わりは不明である。なお邊見は3度目の社命を帯びて売掛金回収に赴いた漢口で日露開戦の報を聞き，軍事工作に関わりたく上海に戻って宮地社長に辞職を願い出たところ，「お互の任務は，徒らに軍閥の走狗とならなくとも，吾々が母国を離れる時，かたき決心を定め目標を立て，東洋永遠の平和のため重大なる使命を帯びてゐるではないか」[12]と訓言され，辞職を拒否されて喧嘩別れした。そして江崙波と名乗る馬賊の頭目となって満州義軍に身を投じた。北京支店長に予定していた邊見が作新社を去った後，その支店開設準備は戢翼翬が担うことになった[13]。今日知れる作新社印刷本の例として，孫文が序文を，宮崎滔天が贈語（題辞）を書いた『太平天国戦史』があり，現在，東京大学東洋文化研究所に所蔵されている[14]。

貫道の中国活動期の第1期に関する情報は少ない。興味深いものとして，わずかに河原操子からの手紙がある。河原が教師として滞在する内蒙古喀喇沁（からちん）王府内から上海の貫道宛に出

されたもので，1904 年 1 月 23 日付である。残念なことに手紙本体はなく封書のみが残されており，また別に，封書の中には「斯道覚民　粛親王　乙巳十月」と書かれた粛親王自筆と思われる書が入っている。乙巳は 1905 年なので，手紙と書は別時点のものであろう。河原は周知のように，下田歌子の関係者であり，親日家である内蒙古喀喇沁王の要請によって王府の教師として赴任した人物で，ちょうど対露戦争を真近かに控えた日本陸軍から特別任務を負わされてもいた。粛親王は河原と親しくなった喀喇沁王妃の兄にあたる。河原は下田の紹介で，貫道の中国行きに先立つか同じ頃，1902 年 9 月に上海務本女学堂の教師として着任しており，1903 年 11 月には上海を発って喀喇沁に向かっている。喀喇沁には 1903 年 12 月から 06 年 1 月までの 2 年余滞在していたので，王府着任 1 ヵ月後に貫道に手紙を出したことになる[15]。貫道と下田，下田と河原の関係を考えると，貫道が中国に渡航する前からなのか，あるいは上海到着後からなのか，河原との交流が予想されるが判然とはしない。

注

1）前掲『対支国策論』1 頁，附録 5，7，11 頁。
2）前掲『棉花国策』2 頁。
3）前掲『札幌農学校同窓会』の各回報告，内蒙古喀喇沁王府内の河原操子から宮地貫道宛の 1904（明治 37）年 1 月 23 日付の書簡〔Ⅲ-4-1〕，貫道から鈴木珪宛の 1913（大正 2）年 6 月 26 日付の書簡〔Ⅲ-4-2〕。
4）作新社の正面前の写真には，貫道，男性 2 名，中国人らしき女性 2 名，子供 1 名が撮っている〔Ⅲ-6-②-23〕。
5）6）前掲『満洲義軍奮闘記：自伝』34 ～ 35 頁。
7）前掲『中国留学生史談』17 ～ 18 頁。戢翼翬自身は，1908 年に光緒帝擁護の新聞記者会見をしたために本籍地の湖北省に返されたが，粛親王の助力と湖北総督趙爾巽の縁によって相当の官職を与えられた，しかしまもなく死去している（同書，19 頁）。
8）前掲『滔天全集』第 4 巻，485 頁。
9）10）11）12）13）前掲『満洲義軍奮闘記：自伝』36 ～ 39，70，87 ～ 90，109 頁，前掲『下田歌子先生伝』427 ～ 429 頁，前掲『対支国策論』附録 16 頁。
14）前掲『滔天全集』第 4 巻，485 頁。
15）前掲『カラチン王妃と私』，304 ～ 305 頁。前掲『下田歌子先生伝』では，河原が上海務本女学堂に着任した時と，邊見が作新社を興したのはほぼ同時代と見られるとしている（438 頁）。

5．新聞経営と宮崎滔天とのかかわり

中国活動期の第 2 期についてである。貫道は 1914 年 10 月 1 日，上海で『上海日日新聞』という日刊邦字新聞を創刊した。それまで上海における邦字紙は 1904 年創刊の日刊『上海日報』（前年創刊の週刊『上海新報』の継承）があったくらいで，同紙は華中言論界の一大勢力をなしていた。その創刊時の上海在住日本人は約 3000 人であったが，日露戦後には 5000 人，

8000 人，1 万人と急増し，同紙だけではすべての状況が伝えられず，新たな邦字紙への需要が高まっていた，その時に『上海日日新聞』が創刊された。貫道は代表者（持主）兼社長であり，編集幹部には柏田忠一（天山）を迎え，後に石川源治となったが，何時からか不明だが貫道自身が主筆になり，おおいに健筆を振るい始めた。創刊時に「主筆に新人法学士柏田天山氏を得其論ずる所悉く邦人の生活問題たらざるなく其煩悶と覚醒と要求の文字は大に上海の惰眠を破り編輯又新にして紙価大昂りたり」とされる。柏田が去った後，後を継いだとされる石川源治については不明だが，社長の貫道自らが筆を取り，1919 年 6 月の中国学生の日貨排斥運動が盛んな折には大いに敏活な記事を掲げて世人の注意を引いた。『上海日日新聞』は辛亥革命後の中国の政局および経済事情を通じて名を博したといわれる。発行部数は 1300 部（1916 年），2000 部（1919 年頃）である。1919 年頃の案内書には創刊号から年中無休とある。1926 年当時，上海邦字紙中で唯一輪転機印刷によっていると自ら誇っており，同年に東京支社を設けて，そこで『日刊支那事情』創刊を企図している。また時期は不明だが，文明丸というかなり大型の社有船を有しており，自動車ももっていたことが「貫道資料」中の写真からわかる。経験上，日本人職工は雇わないことにしており，中国人労働者 70 ～ 80 人を常に雇用していた。1919 年頃の頁数は 8 頁，価格は 1 部 4 セント，1 ヵ月 80 セント，3 ヵ月 2 ドル 25 セントであった[1)]。まだ調査不十分であるが，同紙の現存・所蔵状況は以下のごとくである。日本では東京大学が 1931，33 ～ 37 年分を所蔵していることのみ判明しており，国立国会図書館などでの所蔵は確認されていない[2)]。中国での状況は未調査である。これとは別に関係部分の記事だけであるが，先にふれたように「貫道資料」中に貫道の執筆記事（1929 年 7 月頃～ 35 年 1 月 12 日）の切抜き帳があり（「成民集」1 ～ 149 頁），宮崎滔天の執筆部分（1918 年 5 月～ 21 年 10 月掲載分）が『滔天全集』に再録されている。後者は宮崎家に残されていた切抜きによる[3)]。貫道が同紙を去った後，『上海日日新聞』は他紙と共に『大陸新報』に統合されたので（1938 年 12 月），1914 年 10 月～ 38 年 12 月の約 24 年間刊行されたことになる。

では貫道の宮崎滔天との関わりはいかなるものであったか。滔天は早くも 1891 年，20 歳の時に兄彌蔵の影響で中国革命を志し，翌年上海に出かけているので，似たような行動をとったと思われる貫道にほぼ 10 年先行している。周知のように滔天は 1897 年に日本で孫文に会い，それ以降は日本人中で最も孫文を理解する協力者となり，日中両国において中国革命支援の活発な活動を行なっている。ちょうど貫道が東京にいたと思われる 1901 ～ 03 年頃は，滔天は恵州蜂起の失敗もあって浪花節語りになり，政治的には沈潜していた時期といってよく，そのためもあってか貫道との関係は生じていないようである[4)]。『滔天全集』には，貫道について，「上海を根城に，辛亥革命前から，多彩な活動を通して，日本，中国の革命同志の間に広く知己を有していたようである。辛亥革命直後，滔天は，彼を知ったといわれるが，晩年の滔天が，全て『上海日日新聞』に寄稿し，公私にわたる深い交際を続けていた機縁も，

このあたりにあるかと，推測される。」[5] と述べられている。そのため『滔天全集』全 5 巻，約 2500 頁にわたる滔天執筆部分のうち，約半分が『上海日日新聞』掲載記事で占められており[6]，いかに同紙が滔天の言論活動において大きな役割を果たしていたかがわかる。黒龍会機関紙『亜細亜時論』（1918 年 5 月）に掲載した滔天の意見が同誌の論調と異なることになり，以後，1921 年 10 月までの期間，全て『上海日日新聞』に寄稿した。同紙が国外邦字新聞という性格のための気安さからか，日本の政局，対中国策にたいして忌憚のない筆誅を加えていたとされる[7]。

貫道と宮崎滔天との私的交際について確認できるのは，杭州での接待（1916 年 10 月 8 日），上海での黄興見舞い（同年 10 月 29 日），東京での貫道家族の滔天宅訪問（1920 年 3 月 22 日，5 月 25 日）などである。その他にもしばしば貫道の病状などを気遣った滔天の言葉，酒を飲まない貫道に対し禁酒の試みをする滔天の複雑な心境の吐露，貫道と萱野長知との碁対局などが書かれている[8]。杭州での接待についてだが，貫道は長男を杭一と名づけるほど杭州との関わりが深かった[9]。いつごろからかは不明だが，貫道は杭州で農園を経営している。その経営規模や目的，同地でのそれ以外の事業は不明であるが，「貫道資料」中に 1916 年 12 月 8 日～ 18 年 1 月の「杭州宮地農園」の写真が多数残されている。写真には貫道夫妻，農場長，その他人物，整地工事風景，農場宅，東屋，カボチャの収穫風景，芋畑・ネギ畑，牛・山羊・アヒル・鶏・犬などが写っている[10]。滔天はこの杭州宮地農園を訪れて貫道から接待を受けた。杭州出身の革命家，秋瑾女史[11] の墓参などの後に貫道の案内で領事館を表敬訪問し，居留地にある農園を見物して昼飯のご馳走を受けている[12]。その 1，2 週間後の上海で，貫道は病気の滔天を見舞い，黄興の病状を確かめているが，その時の滔天の記述が面白い。「社長は入歯を噛み〆て，『そりや不可ん，それは君の観察通りだ。モ一度松本君に御苦労を頼んで，一欧君の直接の話を聞いて貰うじやないか』と云われるのです。私は悲観論の賛成者を得て今更のやうに心細く」なり，病状悪化の黄興を見舞ったとある。果たせるかな黄興はその 2 日後に亡くなり，滔天の他，孫文，胡漢民，朱執信，何天炯，唐紹儀ら後の国民党幹部らが駆けつけたが，当然貫道もそこに加わっていたと思われる[13]。これらのことからも，貫道の後の国民党幹部たちとの親密な関係が想像できる。滔天が『上海日日新聞』に最初に寄稿したのは，この黄興死去からほぼ 1 年半後の 1918 年 5 月のことである。滔天の黄興追悼 3 周年の思いでの記も同年 11 月の同紙に掲載された。貫道が年に 1 回，家族のいる東京に帰っていることが滔天の執筆記事からもわかる。同年秋に東京に戻った貫道から，隔日執筆して欲しいとの厳命を受け，滔天は同年 12 月 1 日に吉野作造論などを寄稿した。家族付き合いもしており，貫道の夫人・その母・長男杭一が滔天宅を訪問している[14]。

注

1）以上は，蛯原八郎『海外邦字新聞雑誌史』（学而書院，1936 年）272 頁，中下正治「中国におけ

る日本人経営の雑誌・新聞史―その１　明治期創刊のもの―」6 頁，「同―その２　大正期刊行のもの―」35 頁（『アジア経済資料月報』第 19 巻第 7，9 号，1977 年 7，9 月），前掲『滔天全集』第 1 巻，621 頁，第 5 巻，549 頁（原典は『上海案内』金風社，1919 年，第 8 版），前掲『対支国策論』附録 11，16 ～ 17 頁。引用文は上記『上海案内』による。「貫道資料」中に，上海日日新聞社のものと思われる植字工場，印刷工場，編集室風景，文明丸全景，文明丸への乗降風景，「上海日日新聞社旅行用」という表札の掛かった乗用車，社屋屋上にいる貫道ら（1932 年）を撮った写真がある。また文明丸か否か不明だが甲板上の乗組員などの写真，先にふれた甲板上の新渡戸稲造らしき人物と貫道らを撮った写真もある。文明丸所有については「上海日日新聞社所有船文明丸写真」と表記した袋の表記によった〔Ⅲ-6-③-24 ～ 34〕。別に「日刊支那事情発行趣意書」〔Ⅲ-2〕があるが，『日刊支那事情』が創刊されたのか否か，その現存・所蔵状況は不明である。編集幹部は編集長あるいは主筆と呼ばれているようだが不確かである。発行部数について，『上海日報』の方はかなり後の時期だが 3000 部（1929 年）であった。

2）東京大学では情報学環社会情報研究資料センターが 1931 年 1 ～ 8 月，33 年 5 月～ 37 年 4 月分を所蔵しており，明治雑誌新聞文庫（大正期も若干ある）での所蔵は確認されていない。

3）「昭和期のものは東京大学に所蔵されているのが判明しているが，滔天の執筆時期，大正期のものは，現在，わが国に残存されているかどうか不明である。本全集では宮崎家に保存されていた同紙の切抜きを底稿とした。」（前掲『滔天全集』第 1 巻，657 頁。）

4）宮崎滔天（1871 ～ 1922）については，前掲『滔天全集』第 5 巻，659 ～ 679 頁。また寺廣映雄著『中国革命の史的展開』（汲古書院，1979 年）第 3 部第 3 章「宮崎滔天と中国革命」を参照。

5）前掲『滔天全集』第 3 巻，612 頁。

6）同上，第 1 ～ 5 巻から計算。

7）同上，第 1 巻，621 頁。

8）同上，第 1 巻，566 頁，第 3 巻，223，226，233 ～ 236 頁，第 4 巻，372 頁。

9）長男杭一氏は，1914（大正 3）年 10 月 31 日に，中国では良い産婆さんがいないということで，夫人が日本に戻ったときに生れている。貫道が杭州の地に好印象をもっていたので杭一と名付けられた（2008 年 1 月 13 日，宮地幸子氏からの聞き取り）。杭一氏は，東北帝国大学工学部卒業後，電子工学研究者として，日本放送協会，松下電器産業株式会社，芝浦工業大学に勤務され，1981 ～ 86 年には同大学学長の職に就かれている一方，早川俊雄の筆名で，舞踊評論家としても活躍された（宮地杭一著『一技術者からのメッセージ』私家版，1994 年，早川俊雄著『舞踊に魅せられて』私家版，1994 年）。1999（平成 11）年 9 月 5 日に逝去された。

10）写真は〔Ⅲ-6-①-1 ～ 22〕。

11）秋瑾（1877 ～ 1907）は，1904 年に来日し，実践女学校附属清国女子師範・工芸速成科に籍を置き，1905 年に帰国した（鄭雲山・陳徳禾著『秋瑾評伝』河南教育出版社，1986 年，210 ～ 216 頁，中華書局上海編輯所編『秋瑾集』同所，1960 年の重印版，上海古籍出版社，1979 年，9 ～ 10 頁）。

12）前掲『滔天全集』第 1 巻，522 頁。

13）同上，第 1 巻，524 ～ 527 頁。松本は滔天の協力者の松本蔵次，一欧は黄興の長男。

14）同上，第 2 巻，42 ～ 43 頁，第 3 巻，223，323，388 頁。

6．長江は第一線にして，満蒙は最後の塹壕なり

中国活動期の第 3 期についてである。貫道は著書の中で，「筆者が閑寂孤独の境界から脱し，始めて社会の表面に現れたのは，千九百二十六年即ち昭和元年の秋，広東の国民党がソビエット政府の援助の下に，長江進出を企てた時であった。」[1] と述べている。このとき絶叫したスローガンが小論の題名，「長江は第一線にして，満蒙は最後の塹壕なり」である。国民党は連ソ連共の改組，国共合作を行い（1923 年 12 月），広東で国民政府を発足させ（1925 年 7 月），第 2 回全国代表大会を開いて体制を整え（1926 年 1 月），国民革命軍による北伐を開始した（1926 年 7 月）。北伐軍は半年たらずのうちに揚子江流域に達し，上海の真近に迫った時，貫道は深刻な危機意識を抱いて社会の表面に現れた。貫道によれば，日中両国の志士が集まって緊急対策を協議し，また国民党西山派の諸士と意見交換を行った。自己の『上海日日新聞』紙上だけでなく，雑誌『外交時報』等への寄稿を通して積極的に意見を表明し，日本政府・外務当局への意見具申も行ったようである。緊急対策の協議では，江西省で敗北した孫伝芳軍は国民革命軍の上海進出を到底阻止する力がなく，上海が赤軍の勢力下に入るのはもはや免れない形勢にある，大上海を赤化から救う唯一の方法は白色国民軍を組織して上海をその支配下におくことであり，そのためにまず孫伝芳の国民党への入党，次いで国民党中の反ソ反共派である西山派への合流，そしてあらゆる白系軍隊の大合同を策することであるという点で相談がまとまった，しかし国旗問題で最終的に意見が決裂した，と貫道は述べている。

国旗問題，すなわち満州問題で国民党側の真意を確かめるため，上海仏租界の許崇智邸に中国側からは張継を代弁者として，許崇智，居正，陣中孚他 1 名が，日本側からは貫道を主なる代弁者として，萱野長知，岡田有民が集まり，腹蔵のない意見交換を行った。しかし，中国側の意見は，国民党の伝統的政策である国権回復主義に基き，満州における日本の特殊権に対して少なくとも表面上の放棄を要求すること，満州鉄道問題も主権主義を主張するものであり，意見の一致はみられなかった，としている[2]。張継は留学時代は貫道と共同生活をし，貫道の中国渡航に同行したともされる国民党古参幹部であり，当初は孫文の近くにいて連ソ連共政策を支持していたが，後に同政策に冷淡となり，1924 年には共産党弾劾案を提出している。張継らと意見を同じくする古参国民党幹部の一部が，1925 年 11 月，孫文墓所の北京西山で国民党会議を召集して反共産党の決議を行った。そのため張継を含む彼らは西山派と呼ばれた[3]。前述のように，貫道はこの張継と「親交を続けること二十五年間，尋常の交誼を以って認むべき間柄ではなかった」[4]。貫道によれば，国民党極右派の西山派すら満州問題でこのような強硬意見なのだから，中央派，左派，極左派の意見は推して知るべしであり，満州問題での日中間の融和は絶対にないことを確信した。では貫道はいかなる対応策をとるべきと考えたのか。日本が中央問題でいかに譲歩をしても結局満州問題での決裂は免

れられないのだから，中央問題での無益な譲歩はやめ，むしろ日本が中央問題で列国共通の権益擁護者として起ち，列国共同の戦線を張ることが賢明で時宜に適した政策である，というものであった[5]。それを端的に表すスローガンが小論の題名の「長江は第一線にして，満蒙は最後の塹壕なり」である。ここで「中央問題」と「満州問題」，「長江」と「満蒙」という対比的言葉に注意が必要である。

この緊急対策協議の後と思われるが，貫道は，以下のようなより詳しい見解を『外交時報』掲載論文（1927 年 1 月 17 日成稿）[6] で述べている。いまや国民政府の政権・軍権は共産派が掌握しており，ソビエト中国共和国建設を最終目標として占領区域には労農式共産制を実行せんとしている，列国の対中協調の破綻を利用して日英離間を策して盛んに反英宣伝を行い，占領した漢口では英租界を強行的に回収した，従って上海占領時には事実上の英租界である共同租界を回収するだろう，ところで日本は上海租界外及び租界接境地に紡績工場その他の莫大な資本投下をした経済的施設を有している，だから租界地のみならず大上海を防守しなければならない，大上海を守るには江蘇省・浙江省の防衛が必要だが，少なくとも江蘇省を国民政府の手に渡してはならない，国民政府が上海支配権を握れば長江以南を完全に征服したことになり，長江流域の日英両国の経済的地位は根本的にくつがえり，次には北方軍閥が倒壊して満蒙における日本の特殊的地位が動揺し，日本国内産業の疲弊と失業者増大などが起るであろう，と述べ，国難来たりと絶叫した。

貫道は，こうした事態は，日本歴代政府の伝統的対中政策である不干渉主義が主因となって日英間での対中政策の意見の疎隔が生じたことによって，また，中国国民党の内情を知らずに国民政府の行動を単なるを国民運動の表れだと思っていることによって生じたと考える。貫道の国民党認識は，共産党と国民党の合併後，国民党の組織部・政治部・宣伝部などの主要機関は共産派の手中に入り，国民政府の反共産化は不可能となっている，孫文の三民主義は概括的な原則論にとどまって極端な排外思想は含んでおらず，もしも孫文直系の純正国民党が中枢機関を保持したならば極めて穏健で案外平和に時局解決ができるであろう，とするものである。したがって取られるべき政策は，日本が傍観政策を放棄して日英協調策をとることであり，日英が離れては時局処理は不可能であると考えた。以上，国民革命軍の北伐の進行，共産派が主導権をもつ国民政府の統治は日本の中国権益を喪失させて日本の国家的危機をもたらす，日英を主とする列強の共同行動によって国民革命軍の北上を阻止すべきである，とくに上海占領を阻止すべきであるとする趣旨である。この貫道説の特徴は，関内中国とくに上海を重視していること，反共右派の西山派との人脈を通じて国民党の内部事情に通暁していること，日本の対中政策を批判しつつ対案を出していることにある。

論文執筆の約 2 ヵ月後，上海では北伐軍進出に呼応して労働者 80 万人参加のゼネストと 3 度目の武装蜂起が行なわれ，反国民政府軍が敗退して上海臨時政府が成立した。しかし間もなく到着した蔣介石率いる北伐軍が「4 ・ 12 クーデター」を断行し，臨時政府側を徹底的に

弾圧した。貫道が期待した列強の共同行動ではなく，国民党内部の分岐によって事態は「解決」した。漢口租界の回収を行なったのは国民党左派と共産党であったが，上海租界を維持したのは元来国民党中間派と目されていた蒋介石である。北伐軍による上海制圧後，ほどなく国民党における蒋介石の主導権が確立され，漢口，南京に分かれていた国民政府・国民党は南京で統一される一方，国共合作は崩壊し，共産党は各地での武装蜂起に敗れた後，井岡山に立てこもってソビエト（労農政府）地区建設の方針に転換した。蒋介石の行動の背景には，労働者･農民層に依拠する共産党の勢力拡大に警戒心を高める資本家･地主層などの危機意識の増大，右派を中心とする国民党内での反共の高まり，北進過程で軍閥軍を吸収して肥大化した北伐軍の変質，蒋介石自身の浙江財閥への依存などが考えられる[7]。そうした点では，貫道の国民党分析は必ずしも正しくなかった。貫道が期待した列強による北伐への軍事的介入は，後に上海ではなく山東において，列強共同ではなく日本軍単独で行なわれ（1927 ～ 28 年山東出兵），張作霖爆殺事件（1928 年 6 月）も同様な意図で行なわれたが，そこには満州における日本権益の保持が最大の目的とされていた。

注

1）前掲『対支国策論』2 ～ 3 頁。当時の国民党の標榜する排英親日政策は外力駆逐の一手段に過ぎないとしている。

2）前掲『対支国策論』24 ～ 25 頁。

3）西山派とは，国民党右派の理論的指導者である戴季陶が反共的幹部らと共に，1925 年 11 月，北京郊外の西山で開いた会議に由来し，国民党内での共産党勢力を恐れ，それを排除しようとする勢力である。野村浩一著『中国の歴史 9　人民中国の誕生』（講談社，1974 年）122 ～ 123 頁，陳公博著・松本重治監修・岡田酉次訳『中国国民党秘史―苦笑録・八年来の回顧―』（講談社，1980 年）34 ～ 41 頁，小島晋治・丸山松幸著『中国近現代史』岩波書店，1986 年，111 頁参照。貫道著書中では萱野，岡田とのみ記されているが，萱野長知（1873 ～ 1947），岡田有民と推定した。萱野は資金・武器調達などで孫文・革命派を終始支援した人物で滔天の同志，岡田は大倉組社員で貫道の協力者。岡田が大倉組社員であることは宮地貫道講演録「対支問題について」（『鶴之友』第 20 号，1931 年 12 月）13 頁による。

4）張継（張溥泉）の生涯は波乱に富んでいる。長沙で黄興らの華興会結成に参加し（1904 年），逮捕後に再来日して宮崎滔天とも交わり，孫文・黄興らの合同によって成立した中国革命同盟会結成（1905 年）の中心人物の 1 人となり，機関紙『民報』編集人を担当。革命同盟会分裂時代には孫文排斥の第一声をあげたが，1908 年フランス行きの後いちじ無政府主義に近づき，帰国後は意外にも大総統は孫文でなければならないと主張し，辛亥革命後に帰国して国民党参議，第 1 届国会の参議院議長となる。第 2 革命失敗後に日本に亡命し，袁世凱死去後に中国に戻り，孫文の信頼を得て重職を担った（前掲『民国人物伝』第 2 巻，114 ～ 117 頁，『滔天全集』第 1 巻，282 ～ 284 頁，第 2 巻，643 頁，前掲『中国革命の史的展開』186，241 頁）。

5）前掲『対支国策論』27 ～ 28 頁。

6）宮地貫道著「支那国民運動の真相（列強の執るべき共同政策）」（『外交時報』第 45 巻第 3 号，1927 年）。

長江は第一線にして，満蒙は最後の塹壕なり

7）丸山昇著『上海物語―激動と混沌の街―』（集英社，1987 年）117 ～ 120 頁，前掲『中国の歴史 9　人民中国の誕生』154 ～ 156 頁。

7．満州は日本の生命線にあらず

貫道が「始めて社会の表面に現れ」てからほぼ 4 年後に満州事変が勃発すると，貫道は直ちに日本に帰国して朝野の有力者を歴訪し，現在の満州は旧時代の満州と全く異なっており，事変を満州だけに限って地方的解決を図ることはほとんど不可能であると論じた。しかし前述のように，彼の意見は日本では受け入れられず，一笑に付され，孤立して自ら創刊した上海日日新聞社を去ることになる。彼の主張のポイントを著書『対支国策論』から，以下見ることにする。4 年前の意見と基本的には変わらず，その延長線上にあり，事変後なのでより満州問題を立ち入って論じている。その核心は「満州は日本の生命線にあらず」ということである。前述のように，ここでも「中央問題」と「満州問題」，「長江」と「満蒙」，「南」と「北」とが対比的に論じられている。彼の言説には多大の政治的配慮がなされており，それへの注意が必要である。

まず日本の対中政策の課題・使命を，「中国大陸が世界いずれの国からも侵略されぬよう番犬の役割をつとめること」と，「各国通商地として世界の大市場たる中国において，列国の権益を擁護し，その監視の役割をつとめること」の 2 つであるとする。後者がこれまで閑却されてきた結果，満州事変が起った。中国関内における権益否定の動きが満州に波及したのだから，もとになる中央問題から手をつけねば満州問題は解決しない，と考える。では貫道は「満州問題」自体をどのように捉えていたのか。満州だけでの最終解決が得られると思うのは，現代中国の実情に暗く，向こう見ずで無謀な考えである，なぜなら国民党の力はすでに中国最北端にまで及び，満州を中国と離れた別個の存在として扱うことは根本的錯誤であり，満州を含めた「中国国体を同一機体」として見なければならない，とする。そもそも満州を中国関内の各省同様に見ることを不条理とするのは日本及び日本の同情者だけであって，中国側は満州を中央政府治下にある純然たる中国領土と主張しているように，今日の満州はすでに中国の一部と化しており，中国 4 億民衆の利害と感情とを無視せぬ限り，力づくで満州問題を解決することは不可能である，と断言している。ここで貫道が意識的に「現代中国」，「今日の満州」という言葉を使っていることに注意が必要である。

そして「満州は果たして日本の生命線か」と問い，「日本は満州がなくとも，二千六百年生きてきた。日本建国の精神に背きて，国際間の信義を失い，皇祖の教えに背きて，国内の統制を失ってまで，満州解決を急ぐ必要は絶対にない…満州よりは国際信義が大切，満州よりは国内の統制が大事…満州は日本の生命線ではなく，日本の生命線は日本国民の精神にあり」と結論づける。国内統制の喪失とは，満州では外交が軍部に引きずられ，中央問題では軍部

が外務の弱腰を見ぬふりしているという国策分裂，二元外交をさすが，これを貫道は，「あたかも同じ人間に対し，顔でキッスしながら，手で抓(つね)っている形となっているのが，ここ数年間の日中関係の全貌であった」と面白い比ゆをしている。

さらに「満州国」建設について，満州を一独立国と見ているのは，地球上日本だけであり，中国はもちろん全世界は今なお中国の一領土とみなしており，事変は未解決中である。その建設が完全に三千万民衆の自由意志から出発し，建設に要する実力の大部分が三千万民衆の手になり，日本がわずかに部分的援助と後見をするだけに止まるならば問題はないが，もしそうでなく建国の大部分が日本の手によって行なわれるならば非常な困難が横たわり，名目だけは満州国の称を存しおきながら事実上純然たる日本の領土であるかのごとく振舞うのは決して信義ある態度とはいいかねる，と主張する[1)]。

では貫道のいう中央問題の具体的内容は何か。それは列強の有する治外法権と租界地，関税権などであったと考えてよい。貫道自身の言葉だが，「いわゆる不平等条約の撤廃は，国民党の生命としているところ」なので，日本と国民党とは満州問題のみならず対中関係のすべてにおいて絶対に相容れない間柄にある。国民党自身は，混乱した中国の現状はどの国でも革命時代には免れない現象であり，建設に導く道程の一つであると言っているが，それは誤りであり，辛亥革命以後 20 年の歴史に照らすと，破壊だけであって建設に向かう曙光は認められない，と中国政治指導部を批判する。しかも日本とその他列国では中国権益のもつ意義が異なるとし，これまでの寺内式干渉政策，田中式無茶外交は失敗続きであり，とくに幣原外交は見当違いの自主的外交を唱えて英国との協調を拒絶し，それ以来，各国の対中態度は乱調子になって中国へのご機嫌取り競争が始まった，とこれまでの日本の対中政策を全面的に批判する。米国外交の最大失策の 1 つに数えられる九カ国条約に基づき，各国はしだいに中国権益の放棄を開始して早晩地を払うべき情勢となっているなかで，各国は中国ばかりで生きているわけではないが，日本だけはそのようにはいかない，と。

貫道のユニークな考えは，中央問題の決定的な重視にある。現政府は満州問題に対して徹頭徹尾強硬一点張りであり，かりに長江の全貿易を犠牲とし，居留民の総引揚を実行しなければならないようになったとしても，満州だけは離さないという決心で事態の進捗を図っている，と批判する。満州事変に対する国民党政府の報復手段である上海事変がいかに激烈であったか，貿易第一線にたつ上海在留邦人に与えた苦痛，上海に住む日本商工業者に対する打撃，日本商品ボイコットによる関係中国商人の苦痛，一般財界に及ぼす影響はすこぶる重大である，とその甚大な影響をあげている。そのため租界地及び中国人街からなる一定区域を中国軍隊が進入できない中立地帯に設定し，永久に軍閥争闘の戦渦から免れる上海国際都市建設の計画を推奨しているほどである[2)]。

貫道は射程をさらに広げて，歴代政府の対中政策の失敗は独り政府の責任にのみ帰すべきではなく，日本国民全体の現代中国への無知，骨董的中国研究の弊害による認識不足にもあ

ると考え，さらに日中両国の国民性論にまで及ぶ。経済面では対中貿易に関わる商工業者が専門的立場から絶えず研究をしているからその理解はほぼ正しいが，政治・社会面では中国の現状が複雑かつ紛糾を極めているのでその真相をつかむのはたいへん困難であり，日本の朝野中で現代中国について常に妥当な観察をしている者は極めて少ない，と。その理由は，日中数千年の歴史的関係，日本が中国文化を受け入れた関係から一種特別な中国知識が日本人の頭脳に滲み込んでおり，白紙の状態で中国を一外国として見ることが不可能になっており，漢学及び旧中国の文化を研究した目で中国及び中国人を見ることが現代中国を知る上で一大障害となっていることにある，とする。さらに議論を敷衍して，そもそも日本人は相手国の国民性の研究を重視せず，ただ自国の利害及び感情にのみ訴えて相手を意のままにしようとする弊害があり，とくに中国に対してはこれが甚だしい。「忌憚なくいえば，日本人は中国人の国民性を理解せぬばかりでなく，日本人自身の国民性を解せず，中国人の短所のみを認めて，その長所を知らず，日本自らの長所のみを知って，その短所を認めずにいる弊」があり，日本人は骨董的中国のみを知って現代中国事情に暗く，ただ満州に関してだけは不思議に相当の理解をもっている，と皮肉をいう。

ところが日中両国民は兄弟民族なので外貌及び生活様式は酷似しているが，国民性において大いに異なり，一般に日本人は国家思想に富んでいるが健全な個人思想には欠け，逆に中国人は国家思想は乏しいが個人思想には富んでおり，国家思想と個人思想にそれぞれ対応するのが政治的能力と経済的能力とである。堅実なる個人思想が基礎となって健全なる国家思想が生まれ，国家のために犠牲になるのを厭わぬような個人思想でなければ健全な個人思想とはいえない。日中両国民は共に各半面の長所を持っているだけで，共に民族としての短所があり，両方の長所を併せ持っているのはひとり英国民族であろう。以上が，中国滞在 30 年の経歴から体得した貫道の中国及び中国人観であった[3)]。

以上をもって，宮地貫道の事跡の第Ⅰ期である中国活動期についてを終えるが，『上海日日新聞』そのものについてはほとんど述べていないので，今後の課題としたい。

注

1）以上は，前掲『対支国策論』2 ～ 3，17 ～ 19，22，38 ～ 39，42 ～ 43，77 ～ 78，81，85，89，105 ～ 106 頁。

2）以上は，同上，23 ～ 24，50 ～ 52，60，80，93，96 頁。

3）以上は，同上，7 ～ 10，30 頁，付録 8 ～ 9 頁。